

My Page

VOL. **18**
2006.3
情報誌

原点 回帰

時代は大きく変わっているはずなのだが、課題は案外同じようなことであったりする。当初の基点、発想を振り返り、コンセプトや活動を再構築することが必要なのかもしれない。ところで、皆さんの当面する課題は何ですか？

Contents

》巻頭特集

地域づくりの新たな展開
「秋田の地域づくりはビジネス創造へ」

》交流とネットワーク

**「第23回地域づくり団体
全国研修交流会 沖縄大会」**

》参加団体紹介

富来ヤングストーリー女性の会(志賀町)
鳳遊海(能登町)



地域づくりの新たな展開

地域づくりのあり方を考える旅シリーズとして、沖縄(16号)に続いて秋田に参りました。事務局を県庁から外に出した最初の県とかがっていましたが、沖縄と同様課題もあるようです。

事務局の課題だけでなく、地域づくりの活動内容が変わってきているように感じました。コミュニティビジネスに取り組む人達の元気がよいことと、男女共同参画や市民活動支援の事務局を受託しているNPOも、稼げる商品開発、事業開発を試みているところが新しいのか、これからの主流なのか。とにかく元気がよい人があることは確かです。今後も秋田の皆さんとの交流を続けたいものです。



「秋田の地域づくりはビジネス創造へ」

インタビュー

秋田いろり塾ネットワーク会長 阿部 拓巳

沖縄の全国研修交流会でお会いした秋田いろり塾ネットワーク会長の阿部拓巳さんを訪ねて秋田県大館市に行った。大館能代空港まで出迎えて下さった阿部さんに大館市内まで案内してもらい、男女共同参画センター、市民活動サポートセンターの事務局を兼ねた事務所でお話をうかがった。秋田県北部男女共同参画センター長の佐藤つじ子さん、北部市民活動サポートセンターチーフコーディネーターの田畑薫さんにも同席いただきました。



■全国で最初に地域づくりの事務局を県庁から外へ

——いろり塾の事務局が県から外に出たいきざつは?

佐藤●平成10年までは、県が事務局を担っていた。しかし、「地域づくりは、民間サイドから盛り上げてくるものが本物になる。また、盛り上げるためにも

縛らないで思いっきり頑張っているものを応援してゆくのが県」ということに転換した。

——お金を生み出す活動ですか?

阿部●NPOにシフトしてきました。

佐藤●従来の地域づくり、まちづくりではなくて、経済的成果を生み出す活動を重視してきた。

——いろり塾の予算はいくらぐらいなんですか。

阿部●事務費と事業費をあわせて225万円。事業費は半額負担です。自前で行うことが基本で、大きなイベントをや

るとその分だけ持ち出しが増える。それが結構きつい。コーディネーターの研修会や地域づくり団体全国研修交流会に参加するのも、半額負担している。会議のお茶代は事業費には含めないけど、それ以

外は事業として計算し、半額負担になる。それぐらいだったら、もらわないで自前でやっていた方が楽なのかなという話がよく出る。ネットワークに対する助成なので、構成団体は独自に自前で活動している。

■事務局移管の課題

——いろり塾ネットワークそのものはどういう活動をしているのですか。

阿部●交流会ですね。あとは対外的な活動です。全国大会に行くとか。交流会は年に1回、地域を回る形で行っている。

——最初は広告代理店さんが事務局を受けていましたね。

阿部●1年半でした。全国大会をはさんで今やっているところに移したが、うまく機能していなかった。

——事務局が代わった理由は?

阿部●事務局を担当していた人が地域づくりの実践者じゃなかったからなのかな。

佐藤●一緒にやっている仲間がいろり塾に出て行くと、情報交換とか、つなげ方とかもスムーズに行くんでしょうけど、まったく関わりがないと難しい。



阿部 拓巳
秋田いろり塾ネットワーク会長



■ 目的を明確にした地域づくり活動

——この地域のなかで、ここを拠点に活動していくだけで十分だとも言える。テーマによっては全県的なつながりで事業を行うこともあっていいと思いますが、無理して全県的なネットワークを維持していく必要があるのかどうか。

阿部 ●なんでもありの地域づくりではなくなってきている感じだ。NPOのように主目的を明確にした地域づくりが必要。そこに横のつながりが出てくる。そこにネットワークをくっつけていければいいのだろうけど、なかなかそれが動きださない。

地域自治ということを進める場合でも、これまでのネットワークの経験や知識は役に立つ。20年余地域づくりに関わってきたが、その経験知や蓄積を活かしていきたい。



——阿部さんはどのような地域づくりに関わってこられたんですか。

阿部 ●一番最初は青年会を立ち上げた。デザイン会議を立ち上げて、バレー大会をやって、広告を集めて、その中のフィールドで大きいトランプを作って大会をやったりとか、まちを、青年をフィールドにした地域づくりをやってきた。それから、地区活動にシフトしていった。ひない塾という地域の資源を利用して活性化するための組織を立ち上げて、異業種交流をしながら、地域づくりを考えてきた。そして町のランドマークを作って、キャラクターも作り、平成5年ぐらいからやっているとの市もやってきた。その間にいろいろ塾にはまった感じで、ずっとやってきた。



アメッコ市のチラシと
アメッコ市で販売した古代米で作ったあめ

■ 秋田県の地域づくりをリードする

——秋田県全体の事務局も代表も県北にいるというのが面白い。

佐藤 ●若い人たちの活動が出てきて、そういう人たちをもっと増やさないといけないということで、肩書きのいっばいつている人が上に立つのではなく、実際に活動している人を上にあげて、フットワークを軽くしたネットワークにしましょうということを何年間か仕掛けさせていただいた。

阿部 ●それは知らなかったな。

——そういう議論はどこでされるんですか。

阿部 ●企画委員会があります。

——それは何人ぐらいおられるんですか。

阿部 ●県の出先がある8つの地域から8人出て、企画委員会が構成されている。私が会長になったのも、当時の会長が突然辞めたので、別の人が代行を務めたのですが、その後、私がすることになった。

——ずっと県北の人が会長なんですか。

阿部 ●いろいろ塾が出来て最初の会長が県北の人で、ずっとその人がしていた。

——ネットワークは残したいわけですね。

阿部 ●残したいですね。

佐藤 ●残すべきだと思っています。

——あとは県との絡みかたですね。

阿部 ●県との絡みを無くしてしまうと本当に関係が切れてしまう。

■ 行政の人の地域づくりへの関わり

——行政の人は地域づくりにどのように関わったらいと思われませんか。

阿部 ●行政は何をしているの?という感じですね。私の持論ですが、行政の人間は地域のためにあるべきだと。金もらってるわけだから。

——金もらって地域に関わる仕事をしているのですよね。

阿部 ●24時間、地域のことを見ていないと、いつも思うんですよ。地域の問題に対しては親身に取り組んでくださいと。少なくとも自分の仕事があって、そこをどうにか良くしようと思うと、それぞれ地元にいるわけですが、問題が浮かびあがってくるでしょうと思うのだけど、なかなか、そうはなっていない。



地域づくりの新たな展開 「秋田の地域づくりはビジネス創造へ」



佐藤 つば子
秋田県北部男女共同参画センター



地域づくりの新たな展開 「秋田の地域づくりはビジネス創造へ」



佐藤●遠野の道の駅で1坪ショップを作った女性たちの活動を支えてくれた行政の職員のような人もいますよね。行政は住民が活動しやすいような状況をつくるために努力するのが仕事だから支援し続けてくれているとかがっています。

——行政の人は地域の中では能力の高い人がまとまっているところ。それなりの人件費を払っているのですから、彼らの能力を活かさない手はないということをよく申し上げている。彼らの能力をいかに活かすかが、地域を魅力的な場に変えていくためにも重要なことです。

阿部●行政というのは地域の人からみると毛色が違った存在に見えるところがある。地域に入っていくとお客さんになってしまうところもある。信頼を得るには地域に入っていくことが必要だ。

佐藤●行政も本当はやっていないわけではなくて、下積みのこととか、いろいろやっているんですけど、それを公表しないと、やっていないと言う人が多すぎることはマズイ。それとやる側も、分からないことを敷居が高いと思わないで、敷居を飛び越えてダイレクトに行くという勇気を持つことが必要です。——最後は人間的に信頼されるようになれるかですよね。どんな事業に関わっていようが。

阿部●行政の人は競争しないですよ。身分が保障されて安定していますから。そこで止まっちゃう。——阿部さんも一応市役所の職員ですけど、市役所の中ではどのように評価されているのですかね。

阿部●地域づくり活動はプライベートですから、評価されてることはないでしょう。

佐藤●去年、亀地宏さん（ジャーナリスト）に来ていただいてシンポジウムをやった時、シンポジウムの後の懇親会で、前町長が、阿部さんは普段はおとなしいけど、こんなことをちゃんとやっていたんだと言われ、感心されていた。

——静かに、潜行しているんですね。

佐藤●秋田県の場合は、多分、派手にやる人と、地道にやる人と、二手に分かれていて、派手にやっている人が地道なことをしっかりやっているかと言うと、そうでもなかったり。地道に仕掛けて

いる人は声をあげなかったりで、美德とは言わないけれど、なんとも思っていない。

阿部●役所は恵まれています。休めますし、いい身分です。みんなが、なぜ地域づくりをやらないのかな、楽しいですよ。自分の世界がどんどん広がっていきます。それと、いろんな人と会って、知識も広がっていきますし、それは当然仕事にフィードバックできるので、仕事にもよい影響が出ているはずですよ。

——遠野の菊池新一さんから、これまでされてきたことをうかがって、その実績に驚きましたね。

阿部●行政の中にも立派な人がたくさんいます。

■人口ではなくコミュニティの数で評価する

——世界が広がると、もっと仕事を楽しめますよね。

佐藤●本当、その通りだと思う。

——行政の中だけで仕事は完結しないので、すべからく地域の人々や企業、施設などに関わることで、仕事が進んでいくのが当たり前です。民間とのパイプをどれくらい持っているかによって、仕事がうまく運べるかが違ってくる。

阿部●民間の人でつきあいのある人がいっぱいいれば、いざという時でも電話一本で頼めることもある。

佐藤●行政マンもその立場になって初めて、それができるかどうかが分かってくるのかもしれない。

阿部●忙しいけど、楽しい。地域づくりもライフワークですよ。小さなコミュニティをこれから、ますます重視していかないといけない。しかし、50年前にあったコミュニティは残っているところが多いが、今後50年それがどれだけ残っているだろうか。コミュニティがなくなるというのはさびしい話だ。人口ではなくて、コミュニティの数で地域を評価すべきだと思う。

■ワンディシェフの店

——大館で頑張っているという「ワンディシェフの店」について教えて下さい。

田畑●ワンディシェフの店を始めた湯瀬さんは、結婚相談所を目的にしたNPO法人を作りたいと、昨年の春ぐらいから私の勤めるセンターに通っておられました。少子化を憂いて、結婚しない男女が増えている、結婚しても子どもを生まない、日本の将来が心配だ、ということで、昨年の9月にNPO法人早麻ライフサポートセンターを設立しました。さらに、昨年末から、ワンディシェフの店の準備をしてきた。その際には、平成15年の秋に秋田県のコミュニティ・



田畑 薫
北部市民活動サポートセンター
チーフコーディネーター



ビジネス推進事業第1号として認定され、ケーキの店をスタートさせている畑沢貴美子さんがサポートしています。畑沢さんは、それまで20年間、地域の運動会などに手づくりケーキを出して好評を博していた。それをコミュニティ・ビジネスとして事業化したらどうかと私も提案した。県からいただいたお金で、自宅を改造して厨房や包装するところを作った。そして、スタートして、徐々に販路も広がり成功してきた。昨年のクリスマスには250個のケーキの注文を受けた。添加物を加えていない自然食品で、しかも値段も安い。彼女はスポーツ少年団やフリーマーケットを開いたり地域活動に熱心に取り組んできた方です。そのような畑沢さんの成功もあって、湯瀬さんが早麻ライフサポートセンターを立ち上げると同時に、ワンディシェフの店も一緒に開きたいということになった。そして、2月8日にオープンしました。空き店舗対策事業として、最初の1年間は県と市で家賃の4割を出すことになっています。2年目は2割補助になります。改装費の30%を出すという補助金もつきました。そういった補助金を得ながら活動を始めました。

ワンディシェフのモデルになっている四日市の「こらぼ亭」は70名ぐらいのシェフを抱えているけれど、彼女の店はスタートしたばかりで、10名に満たない状況です。空き店舗を利用して、毎日交代でシェフをする、そして人的なネットワークをつながながら、広がっていかけている。地産地消を特徴に、地場の素材を仕入れて、食事に活かすことが基本です。さらに、地場産品の販売コーナーも設けています。

■行政の積極的な動き

田畑●昨年4月に大館市で「中心市街地活性化事業」ということで、大館市長が陣頭指揮しながら、部課長さん中心の委員会が発足しました。それから、担当係長さんの委員会も始動して、行政主導で中心市街地の活性化の事業に取り組んできている。一方、大町まちづくり協議会という民間の団体も出来て、そこには市、市民代表、学識経験者など10名ほどの委員が参加している。国から100万円の補助金をいただいて、自分たちも行政と一緒に、地域の活性化、まちづくりをしようということでも立ち上がった。ということで、湯瀬さんもそういった動きに自分も貢献できるねと、一緒にやりましよう

ということになった。私は、サポートセンターの立場から、補助金申請や、チラシづくりとかのお手伝いをさせていただいた。

■NPO秋田県北NPO支援センター

田畑●秋田県北部男女共同参画センターと北部市民活動サポートセンターを受託しているのがNPO法人秋田県北NPO支援センターです。指定管理者制度に従って、5年間運営を受託することになっています。私どもは、出来るだけ現場に足を運びながら、支援活動をさせていただいています。人と人とのつながりを広げながら、人を最大の財産ととらえて、活動しています。

——田畑さんの支援は具体的にどのようなことになるのですか。

田畑●具体的には、北部市民活動サポートセンターの立場として、ボランティア・市民活動の相談・広報誌の編集、県の補助金申請のお手伝い、NPO法人設立のお手伝い、空き店舗対策事業の申請のお手伝い、オープンする際には周辺への挨拶回りもお手伝いします。それから、チラシづくりのお手伝いなど、出来る限りのことをさせていただいています。

——コミュニティビジネスについて、地域の課題はどのようなことでしょうか。

田畑●地域で困ったなという問題とか、課題は行政だけで解決できなくなっているのが現状です。そこで、ボランティアが集まって、それが市民活動組織となりながら、地域住民自らが解決していかないといけないという機運が生まれてきた。その一環として、私どもはNPO法人の立場もありますし、行政と協力連携しながら地域づくりのためにやっています。



地域づくりの新たな展開
「秋田の地域づくりはビジネス創造へ」

秋田いろり塾ネットワーク 事務局

〒016-0842

秋田県能代市追分町4-5 能代地域活性化協議会内

TEL (0185)54-6699 FAX (0185)54-6780

URL: <http://www.shirakami.or.jp/~irori/>

E-mail: irori@shirakami.or.jp



左…湯瀬早百合さん 右…畑沢貴美子さん

秋田県のコミュニティビジネス1号として、県から支援を受けてケーキ屋さん「コミュニティ菓子工房KIMIKO」を営んでいる畑沢貴美子さんと、彼女も応援して立ち上がった「ワンディシェフの店」を営んでいる湯瀬早百合さんにお話をうかがった。

■コミュニティビジネス

——「ワンディシェフの店」を作られたいきさつを最初をお願いします。

湯瀬●昨年、畑沢さんに、何かやりたいと思うのであれば、10月にオークションがあるから、それまでに何をやりたいか、整理しておきなさいと言われた。畑沢さんは、秋田県のコミュニティビジネス推進事業で第1号の支援を受けた人で、彼女からすすめられた。何かやりたいとは思っていたので、四日市ですでに同じようなことをやっている「こらぼ亭」をインターネットで調べて、だんだん興味がわいてきた。毎日シェフが変わるということは、毎日違う料理が食べられるということだし、面白いなと。

それと、私がやっている暮らしと結婚の相談所の事務所を構えるとしても、ただの事務所より、レストランをやっている方が気軽に入ってこれるのじゃないかなということもあった。それで、真剣に考えて、10月のオークションをむかえた。コミュニティビジネス支援のオークションが秋田であった。たまたま支援してくださる人がいらしたので、行うことになった。

——支援者というのはどういう方ですか。

湯瀬●おてふきとか、お茶碗とか、家で眠っているようなものを提供してくださる方です。

畑沢●秋田県で、2年間コミュニティビジネス推進事業ということで、2年間チームを作って取り組んできた。その時に応募したら、第1号に認定された。

——コミュニティビジネスの開業のための資金とかが出るのですか。

畑沢●開店のためのアドバイスをを受けたり、視察に行くのに20万円ほどついた。準備のために20万円、本当に店を出すときに20万円、全部で60万円来るのではなく、40万円です。私はほとんど準備を進めていたので、開業のために20万円をいただいた。

湯瀬●私の場合も20万円です。

畑沢●シェフを募集するつもりで、新聞社とか行っただけですけど、シェフが集まる前に、お客様がいっ

ぱい集まった。今はシェフになって下さいと、一人ひとりお願いして回っている。

■ワンディシェフの意義

——一人のシェフが行う場合と、毎日違う場合とどのように違うとお考えですか。

湯瀬●一人のシェフがやる場合は、どうしても儲けに走ってしまうんですね。10人の人がやる場合は、儲けの前に、まずは自分の生きがいを見出せるのではないかと。

畑沢●そうなんです。わたしもケーキ屋さんを始める前に、更年期障害で涙が止まらなくなって3年間苦しんだ。それで、ちょうど主人も定年になって、手伝ってくれるというので、ケーキ屋さんを始めたら、涙も出なくなったし、心の中のもやもやもなくなって、すごく元気になってきた。そういう奥さんたちに、この店に出て欲しいと思って始めた。湯瀬さんは「早麻ライフサポートセンター」を立ち上げ、男女の結婚相談をやっています。事務所も必要だし、四日市で成功しているワンディシェフの店をやって、一人ひとりの奥様たち、女の人たちの生きがいの場にしながら、オーナーをやってくれないかと、声をかけた。今はまだシェフをやってみようという人は6、7人しかいない。

——名乗りを上げてくださっている人はどのような方々なんですか。

湯瀬●普通の主婦の方々です。一番最初にやってくださった方も主婦ですけど、料理のコンクールとかに出て賞をもらっている人でした。料理学校に9年間通っている人とか、きりたんぽのコンクールで賞をもらった人とか、いろいろです。

——ローテーションはどのようになっているんですか。

湯瀬●今はシェフが少ないので、シェフの都合のいい日に担当してもらっている。それ以外の日は古代米で作っためんを出している。シェフの方が都合が悪くても料理を作ったものを置いていくから、こういうふうにして出してくださいということもある。



巻頭特集

地域づくりの新たな展開
「秋田の地域づくりはビジネス創造へ」





空き店舗を改装して作ったレストラン



春のワクワク定食700円

- ・炊き込み御飯
- ・ブリの照り焼き
- ・キャベツ巻き
- ・酢の物
- ・煮物
- ・山芋の吸い物
- ・おしんこ

シェフがいなくても、お客様に御迷惑をかけないように、毎日違う献立を出すようにしている。

■試行錯誤

——畑沢さんが作られたケーキはこの店でも出てくるんですね。

畑沢●ケーキセットということでメニューに入っていますし、19日にはケーキバイキングをやっている。食べ放題1000円でお土産つき。子どもは300円です。前は合計53名のお客様にお越しいただいた。このお店でお客様が一番多かったのは開店の時で、60人くらい。

湯瀬●何がなんだか分からないうちに終わった。

畑沢●最初に12,000円の入会金を設定したのが失敗でしたね。少しでも運営が楽になればと考えたのですが、主婦の方が12,000円を出して参加するのは難しいみたいです。

——それはどうされるんですか。

畑沢●お試しということで、参加費をいただかずに、試しにやっていただくことにしています。大学の先生とも知り合いになったので、学生さんたちに学習の場として協力いただくことをお願いにいくつもりです。一人ひとりをお願いに歩いて、地道にやっていこうと思う。コミュニティビジネスを始めて3年になるんですけど、まだまだこれからです。

——畑沢さんのビジネスはどれくらい売上があるんですか。

畑沢●最初は320万円。昨年が440万円。テレビ局が30分番組を作ってくれたんです。1月29日に放映された。彼女の方も2月8日開店だったので、手伝いたかったんだけど、テレビで放映されたらすごい反響で、1日に60個も注文があって大変だった。1個が1,300円なので、皆さんに買っていただける。

——それは注文して、作っていただいて、お客さんが取りに行くんですか。

畑沢●主人が配達しています。それと、7日市というイベントに出店して販売しています。

——将来は、商店街の空き店舗に店を出すとか、そのようなお考えはあるんですか。

畑沢●それは無いです。歳だし、誰か私の後を継いでくれる人がいればと思っています。

湯瀬●ここで売ってもらおうかなと思っています。

畑沢●もう少し落ち着けば、持ってこれる。

——アーケード街の「ギャラリー濱」の女将さんは、近くに年配の方が多いので、惣菜が買えるところや、食事ができる場所があれば、という話をされていました。本当はアーケード街の一角にあるといいのでしょうけど。

畑沢●あの辺りで探したのですが、家賃が高かったんですよ。

——ここはいくらですか。

湯瀬●ここは5万円です。

■ネットワークを広げる

——その差額をなんとか出せば、可能になります。

畑沢●ここでも歩いて来れますよ。自分たちも車で店の前まで行く生活に慣れていたけど、この店を利用するようになって、駐車場に車を置いて、歩くようになると、昔を思い出す。

——湯瀬さんは起業をする人を育てるというお考えはあるんでしょうか。

湯瀬●あります。でも、今は自分が育てている最中なので、それが軌道に乗ったら、考えようとは思っていますけど、今は畑沢さんが私を育ててくれています。

畑沢●私は講演で、私のケーキレシピを全部教えるから、能代とか大曲とか秋田でやって下さいと話しています。KIMIKOのケーキ2号店として開業していただくことを期待しています。

——湯瀬さんの、ライフサポートの事業は高齢者のホームヘルプサービスということですか。

湯瀬●そこは今は休業中状態です。結婚相談所が忙しくなっています。3月11日に出会いのパーティを行います。市の広報で紹介されたので、問い合わせもたくさん来ています。



巻頭特集

地域づくりの新たな展開 「秋田の地域づくりはビジネス創造へ」



オリジナルの和梨のケーキ

れすとらんワンディシェフの店

〒017-0896 大館市字大館68-2

TEL 0186-43-0137

コミュニティ菓子工房KIMIKO

〒017-0878 大館市川口字深沢岱79-11

TEL 0186-42-5577

URL <http://kimiko.web.infoseek.co.jp/>

第23回地域づくり団体 全国研修交流会「沖縄大会」

会期／平成18年2月9日(木)・10日(金)・11日(土)
会場／前夜祭：おきでん那覇ビル、全体会：沖縄県立武道館(那覇市)
分科会：県内17会場(12市町村)



沖縄大会には事務局も含め、石川県から12名が参加しました。石川大会にも沖縄から多くの参加をいただいていた。さらに、昨年の沖縄県地域づくりネットワークの総会に、濱、赤須、高峰の3名のコーディネーターが講師と呼ばれ、石川大会の準備や運営についての話をさせていただく機会をいただいていた。沖縄大会の分科会終了後には、北部地域でのネットワークづくりのためのフォーラムに講師として同じ3名が参加しました。

■第5分科会

「環になってつなぐ環境まちづくり」(うるま市)

1.はじめに

沖縄大会では、沖縄県の各地域で17分科会に分かれて開催された中で、第5分科会の研修に参加しました。

第5分科会の「イチグシチャー」分科会は「環になってつなぐ環境まちづくり」と題して、環境保全型まちづくりに関心のある研修生40名が参加して研修交流を行いました。

21世紀は、環境問題が最優先に取り組むべき課題だと思っております。市民活動団体としての取り組み方、市民ネットワークの結び方、個人の意識付けの手法等について、この分科会で教えて(エキスを)もらおうと思って参加しました。

2.第5分科会に参加

「イチグシチャーまちづくり市民の会」の主催による「語らいミニシンポ」と題した事例発表を聴きました。

この市民の会は、環境保全型まちづくりを目指して結成された8つの市民グループがネットワークを結び、川づくり・川遊び、海遊び、緑の保全、ゴミ問題、子どもたちの健康の問題などの環境をテーマとして、情報や人材の交流をしているネットワークの団体です。

ミニシンポでは、次の会のプレゼンターが発表されました。

①うるま市水と緑を考える会

川づくり・水環境づくりを通して、環境教育や水環境の保全活動をしている。

②具志川ちようちよう愛好会

チョウチョの育成を通じた自然保護、環境保全活動をしている。

③中部北ごみ問題を考える連絡会

ごみ問題についての学習会や保全活動を通してごみ減量に努めている。

④Forチルドレン

子どもたちを主体として「知る」「行動する」「伝える」活



動をすることにより子どもたちの食の安全を考えている。

⑤イチグシチャーまちづくり市民の会

地球温暖化防止についてのワークショップを開催し、環境破壊を起こさないよう努めている。

⑥うるま市まちづくり課

環金武湾振興QOLプロジェクトを結成し、環境調和型まちづくり構想を検討している。

寺田コーディネーターによるまとめは次の通り。

・大きな環境破壊は戦争である。環境と平和はイコールである。

・環境保全のまちづくりには、市民、行政、事業者の協働(パートナーシップ)が欠かせない。

・専門家を会員に巻き込んだ活動が行政への説得力があり、実を結びやすい。このネットワークは全国大会のために結成された団体であるが、これを機に次の活動に向けて共通のテーマでの取り組みを進める必要がある。大切なことは、無理をせず、楽しく活動することである。

3.交流会・夜なべ談義

バーベキューを囲んでの交流会では、うるま市長も一緒に話の輪に入って(市長と市民との連帯感が感じられた)和やかな交流をもつことができました。また、沖縄独特の伝統音楽・芸能を披露していただき、沖縄の歴史や文化を感じさせていただきました。

沖縄の活動団体の方々が作ってくれた手料理での夜なべ談議は、心が和み、話に花が咲きました。市民活動を行っているもの同士でのまちづくりの話は、苦労話や本音トークができました。「同じ悩みがあるんだナー。中だるみをしていられないゾー」と思わせるエキスを沢山もらいました。また、初めて知り合った参加者とも親しくなり、たくさんの友達ができ、次回の大会の参加を約束しながら、温かい心からのもてなしに満ち足りた夜を過ごしました。

4.現地研修会

この分科会の活動の拠点になっている天願川の源流である「ピオスの丘」を案内してもらいました。原生林の中に蘭の花が咲き乱れ、希少昆虫が数多く生息する中、渡り鳥も羽を休めていました。

しかし、下流域では自然が崩壊しかけてきました。そこで、この環境を保全しようと市民の会の団体がそれぞれ独自の活動を始めました。その一つの団体である「具志川ちようちよう愛好会」が生命と自然の大切さを知ってもらおうと育てたチョウを参加者全員で放蝶しました。私たちもこの自然をこれ以上壊さないようにと願う気持ちで記念植樹をして祈りました。そして、一人ひとりの熱意が環境の保全につながるんだということを実感した現地研修でした。

5.大会に参加して

地域づくり沖縄大会に参加して、戦争から得た命の大切さを誰よりも知っている沖縄住民がネットワークを結び、環境をキーワードとした活動が環境保全型まちづくりを目指して、自分たちで立ち上がろうしている熱意が、実現につながるんだということを教えられました。

米軍基地による収入源があるが故に、開発が進み過ぎて環境が汚染されてきたそうです。米軍基地が撤退したところは、基地の建設により開発ができなかったため(おかげで)自然が残っておりました。

うるま市具志川の住民は、「これ以上の開発はやめよう、自然を未来に残していこう」と、危機感に迫られて環境保全活動を始めたとのこと。みんなが環境について考えれば、環境汚染や地球温暖化を防止することができると思います。一人ひとりが意識すれば変える力を持っていることを忘れないで、「自然が残る環境」を守り続ける活動を展開していってほしいと思いました。

環境問題は、全国的な問題となっている昨今、私たち「まなびめいと御祓」の参加者みんなで、「便利さばかりを求めないで自然が破壊されないよう、みんなで、身近な所から取り組もうね!」と誓い合いました(エキス、ゲット)。沖縄独特の自然・文化にふれながら、全国の地域づくりに頑張っているみなさんと出逢い、交流を深められた有意義な研修であったと思います。

また、一昨年の石川大会において沖縄大会の参加の約束を交わした島田さんの好意(案内)により、自然が今も残る伊計島の海岸の砂浜を素足で散歩しながら、珊瑚を採取させてもらいました。島民が自然そのままの島や海岸を守り、島の恵みを活かしながらそれを生活源にして暮らしているそうです。名護市では、特産のタンカンの収穫・試食を体験させてもらい、太陽いっぱい育った甘さに舌鼓をうつと共に、生活の様子や家族の温かさを教えていただきました。観光では得られなかった体験ができ、沖縄にどっぷり浸かって、いろんな人たちとの交流が図れて沖縄を満喫してきました。飾らない人なつこい沖縄の人たちが大好きになりました。

小島恵子 まなびめいと御祓

■第10分科会「琉球王国発祥の地」(浦添市)

一昨年、地域づくり団体全国研修交流会石川大会の第17分科会を私共が担当したおり、参加者のお一人が沖縄大会第10分科会の実行委員長を務められ、ご本人より昨年暮れに参加の呼びかけがありました。前回の分科会でお聞きした沖縄での地域づくりの成果確認と石川大会へご参加頂いたお礼も兼ねて参加しました。

○第10分科会

明るく住みよいまちづくりを目指し、市内にある首里王府以前の城跡復元と隣接する河川を城跡のバッファゾーンとすることにより、城跡を世界遺産指定に次世代にとつての誇りある地域資源の創造を行う活動の発表と現地視察。

2/10…首里王府以前の琉球史基調講演と市民会議の活動報告。交流会。分科会



首里城を見学

2/11…浦添市内の史跡視察などの現地研修と児童による地域史ミュージカル観覧

大会外の個別行動…那覇市内の農連市場、

浦添市内米軍キャンプキンザー見学

前夜祭の為、前日入りし那覇市内繁華街の散歩を行ったが、空港をはじめ県庁などの公共インフラ整備は非常に立派であるのに対し、国際通りのメインストリートを一步入った地域などは民間施設の質素さに目をひくものがあった。分科会移動の車中、浦添市に関する説明で、那覇市のベットタウンとして人口が増加し、平均年齢が38歳のまちであり、市面積の15%を米軍キャンプに占有され市海岸線のほとんどが基地のものであること。2,200名の基地地権者に国の思いやり予算で年間42億円の借地料が支払われている事などを聞いた。

昔からの在来市民より転入市民のパーセンテージが多くなり勢いがある反面、共に手をつなぐツールがないこと。基地の存在により市も補助金や基地経済に左右される環境にあることが感じられた。市内見学で訪れた浦添市美術館(建設費17億円)などもその設置に基地関連の予算や収入無くして考えられないのが現状。

分科会を主管するまちづくりでここ市民会議はそのような背景の中、市民が歴史資源を共有し地域を再考することにより環境づくり、人づくりを行っていました。城跡の世界遺産登録を視野に入れ、いかに持続可能な観光資源の確保を図るか。広大な敷地と手つかずの海洋環境をもつ米軍キャンプに関しては取りざたされる返還問題、返還後の活用策、地権者の乱開発など…時間をかけて話し合われるべき問題を解決するため、いまその核となる人づくりの活動を行っている…そんな地域づくりの取り組みを見ることが出来る分科会でした。

吉田 栄治〈特非〉はづちを

■前夜祭から北部フォーラムまで

1.参加の目的と成果

- ・沖縄の地域づくりの活動や団体の様子を肌で感じてく
- ・全国からの参加者のニーズを肌で感じてくこと。
- ・地域づくりのネットワークや支援の全国動向の情報を得ること。

以上のような目的を持ち、同大会に参加してきました。沖縄の地域づくりは、この全国大会を準備することで、市町村と地域づくり団体との連携が非常に深まった、との感想を地元の人から聞きました。

東村の分科会ではこの大会を契機にリーダーの若返りを

第23回地域づくり団体 全国研修交流会「沖縄大会」



Okinawa



伝統的な空間と新しい建築が共存



典型的な沖縄の墓所・グスク

第23回地域づくり団体 全国研修交流会（沖縄大会）



全体会

回りました。見習うべきだと思います。

広域圏市町村事務組合が地域振興に積極的に関わっていることも分かりました。沖縄独自のスタイルです。

濱、高峰、赤須は北部広域圏フォーラムに大会終了後に参加しました。同広域圏では4つの分科会が開催されましたが、全国大会の成果を次の活動にどのように活かしていくかを、真剣に話し合っていました。結果報告会を広域圏で時間をおかずに行った点は大いに評価できます。巧い連携だと思いました。

参加者は例年通り行政職員が多数を占めました。那覇の第8分科会では、主管したコミュニティ沖縄が、沖縄県地域づくりネットワークの事務局を引き受けているため、他県の担当者が「民間運営」の情報を得るべく、代表の石原さんを取り囲んでいました。全国的に県主導から民間への移行が検討されているようです。

沖縄県地域づくりネットワークの事務局は、来年度から「調査隊おきなわ」という情報コンテンツ制作のNPOが引き受けることになっています。そのNPOの理事長にも会うことができました。これまでの中間支援とは毛色が異なるので、どのような事務局運営になるのか、要チェックです。

新潟の事務局を担当していた「ニューにいがた振興機構」が、この3月で組織を解散し、地域づくりネットワークが県主導になることも分かりました。これも新しい動きです。

2.前夜祭

石川大会が始めた前夜祭を、沖縄大会が受け継いでくれました。次回の愛知も行うと言っていましたので、前夜祭が準公式行事になるかもしれません。

前夜祭の内容は歓迎パーティーの色合いが強く、情報交換会としては、やや不満が残りました。面白そうな参加者を探しているうちに、料理がすべてなくなってしまったのも、残念でした。

幹事を務めたのは経営者協会の異業種交流「かりゆし塾同窓会」でした。同団体はイベントに慣れており、運営はスムーズでしたが、それゆえに歓迎セレモニー的になったのかもしれません。

3.全体会

時間の都合で基調講演を設けず、セレモニーに終始しました。そのため、地域づくりへの提言がなされませんでした。「いちやりばちョーデー」という仲間づくりを呼びかけるスローガンはありましたが、仲間づくりはどちらかというと地域づくりの手段と考えられます。地域づくりの未来的な課題を、沖縄が提起し、それを参加者で話し合うと



前夜祭でお会いしたニューにいがた振興機構の長崎氏(右)と地域協働クリエイティブ・スタディチームの阪井氏(左)。

いった構図が欲しかったところです。

全体会で分科会ごとに沖縄の地域づくりをビデオでコンパクトに紹介したのは、全貌を理解するうえで有効だと思いました。

4.第8分科会「時代が求めるネットワークとは？」

1日目はペロタクシーの活動紹介、観光ボランティアによるまち歩きと交流会で終わりました。私は前日から市内のまち歩きはしていたので、ほとんど見たところばかりでした。ただし、まち歩きの間にも他の参加者と名刺交換ができ、親しくなれたのは、その後の話し合いのプラスになりました。

しかしながら、会場に選んだ栄町商店街のガイドをしてくれたほうが、2日目のワークショップに商店街の方も参加していたので、より意義のあるまち歩きになったと思います。

会場の大道公民館に着いたら直ぐに交流会が始まりました。参加者による地域紹介などの工夫はありましたが、立食パーティーの雰囲気は終始し、まち歩きで疲れていることもあり、積極的に語り合うという場面はつくれませんでした。

2日目はワークショップでした。沖縄の地域づくりの状況説明があり、鳥取、石川、新潟の事例紹介を行いました。石川の事例は私が全国大会の成果、コーディネーターの役割などについて話しました。これらの報告から、ネットワークづくりについて、いくつかのキーワードを見つけ出し、それらを共有するという進行になりました。

参加者が想像するネットワークが必ずしも同じでないため、議論がかみ合うまでに時間がかかり、閉会間際に議論が盛り上がるという、いつもながらの光景が見られました。

課題として挙げられたのは「行政と市民との協働」「コーディネーターの育成」などです。行政の役割、市民の役割、コーディネーターの役割については、じっくり話し合いたい重要なテーマでしたが、表面的な理解にとどまっているように私には感じられ、時間不足を恨めしく思いました。

分科会を主管したコミュニティ沖縄の石原絹子氏と地域協働クリエイティブ・スタディチームの阪井緩子氏は、コーディネーターやファシリテーターが巧みで、経験の豊かさや、地域づくり活動の質の高さを感じました。

赤須 治郎 コーディネーター



ペロタクシーの試乗も行った

Okinawa



17号まで発行してきた情報誌

1

参加団体紹介

富来ヤングストーリー 女性の会

代表 松本 久視子

羽咋郡志賀町中浜ヲ51 〒925-0455

TEL 090-2122-4200

URL <http://w2282.nsk.ne.jp/~sutory/>

E-mail sutory@togi.nsk.ne.jp

◆他所ものからの提案

メンバーの原さんが1996年に長崎から嫁いで来て、仲間を増やしたいと誘われて、グループができた。その後、具体的な活動として何をするか、いろいろ議論して、情報誌を出そうということになりスタート。2000年夏からスタートして、17号まで発行してきた。

シリーズ企画が多く、町長インタビューと地区の紹介を毎号続けてきたが、志賀町と合併したのを契機に新たな展開を模索中である。



毎号、町長さんへのインタビューを掲載

◆素人編集人誕生

ネーミングの由来は、当時流行っていた「トイストーリー」をヒントにしてつけた。ヤングは後継者の発掘、育成という意味であって、若者ということでもない。パソコンも持っていなかったのが、情報誌を出すことに決めてから、パソコンを買った。ホームページも小学生の子どもに教えてもらいながら作ったが、途中でわけが分からなくなっている。

毎号、地域の店や企業に協賛広告をお願いしてきた。スポンサー回りが大変なので、あるお金で最新号の17号を制作したが、ページ数が少なく大きな反省点として上がっている。



協会のコーディネーター、赤須さんをゲストに勉強会を行う

地域で必ず聞かれる「若い者がいない」「子どもがいない」という声への反発と、何かをしたいという思いからスタートした女性たちのグループ。6年間、17号まで情報誌を発行し続けてきたが、町も合併し転機を迎えている。代表の松本さんにお話をうかがった。

◆地域づくり協会を知る

穴水で情報誌を発行していた方に相談したら、地域づくり協会のことを教えてもらった。区長さんに回覧のお願いにいったら、教室を開けばいいのではないかとアドバイスもいただいた。協会のコーディネーター・赤須さんに繰り返し話に加わってもらい、今後の活動について検討を重ねてきた。18号以降の新たな展開のために、新たなメンバーも募っている。

◆無理せず楽しく！

最初は3人でスタートして、途中で3人が加わり6人になった。何かしたいと思っているから関わってくれている仲間なので、少しずつでも役割を担いつつ、継続的な活動を盛り上げていきたい。

地域づくり塾で高知県の畦地さんから、「楽しくないといけない」という話をうかがったが、なるほどと感じた。

富来と志賀の人の相互理解と融和を図っていくためのメディアとしての機能を果たしていきたいというのが、メンバーの意向であるので、今後はそのような活動を行っていく予定である。

それぞれの地域を見て回り、一緒に食事をしながら、意見交換を行うことも企画できるとよい。それを記事化することで、編集もしやすくなるのではないかな。



子ども連れでの会議は賑やかだ

鳳遊海(ほうゆうかい)

代表 玉地 大輔
連絡先 干場 健太郎

鳳珠郡能登町宇出津新23 〒927-0432
TEL&FAX 0768-62-0785
URL http://www4.nsk.ne.jp/~d_tama88/

◆鳳遊海とは

「鳳」は「鳳珠郡」を活動範囲にするということから、遊び心をなくしていけないということで「遊」をつけ、普通に会をつけるのではなく、みんな海が好きだから「海」で「かい」とした。メンバーは能都中学校の同級生で、平成7年卒。

平成17年8月1日に設立したが、夏の歩行者天国での売店出店からスタート。企画を練っていくために、メンバーを集めた。それまでは、釣りをし、酒を飲み、カラオケを楽しむという、遊び仲間だった。地域のために何かしたいということで話し合いをするようになったのも、それからのこと。

コアメンバーは11名だが、能登町内には35名の同級生がいる。地域にたくさん戻ってきていて、ちょっとだけ団結力が強い。

なぜかと言われると難しいが、祭がみんな好きなので、それが大きな要素になっている。それと、みんな「帰ってこい!」と声をかけるし、帰って来た時には、みんなでもてなす。そうして帰って来やすい雰囲気を作ってきたのではないかな。

◆歩行者天国でバーを開店

9月17日に宇出津中心市街地の歩行者天国で、能登の名前をつけたカクテルを作り店を出した。代表は札幌でワインバーに勤めていたことがあるので、カクテルを作るのが得意だ。



歩行者天国でオリジナルの酒を販売

その後、毎月の「まんなか市」で何かをしてきている。1月には商店街で鯨やタコの雪像を作る。2月には、昔懐かしい駄菓子屋とファミコン教室を開いた。

唐沢俊一氏「能登一受けたい授業」

町に戻ってきた同級生が徐々に増えて、30人以上になっているという。ただの飲み仲間から地域づくり活動団体へ。地域を面白くしたい、地域で楽しみたいという気持ちが素晴らしい。常に積極的に地域に関わる若者集団として、将来が楽しみだ。

◆唐沢俊一氏の

「能登一受けたい授業」を共同主催

2月4日には、商工会青年部やのと青年会議所と一緒に、テレビでも活躍されている雑学研究家の唐沢俊一氏、デザイナーの開田祐次氏を宇出津に招き、能登の雑学を教えていただいた。唐沢氏は能登町の民宿に毎年のように骨休みに来ているので、能登町への愛着は強く、詳しい。今後も機会があれば、呼んで欲しいと言われていた。開田さんは能登に住みたいとも言われていた。

◆祭の写真を撮影

先日、オリジナルの腕章を作り、曳山祭の写真を撮って歩いた。祭に参加している全員の写真を撮影しようと、祭の間、撮り歩いた。それを商店街の「さしみ屋」に張り出す。お好きなものをお持ち帰り下さいということで、プレゼントするつもりである。合計で700枚ぐらいいは撮影した。その中からセレクトして、300枚ぐらいいを掲示。地元新聞にも写真入りで紹介されたので、反響が大きい。

◆若者交流イベント調査事業

能登町が行っている「エンデバーファンド21助成事業」に申請を行う予定である。都会から若い人を呼んで、一緒に能登で楽しむことを行う計画だ。能登は意外に近いことを知って欲しいし、能登でも元気な若者が多いことを知って欲しい。一緒に体験できることを企画し、みんなの得意技を活かしながら交流できるようにしたい。

どうすれば、都会の人が能登に興味をもって来て、最終的には、能登に移住してくれるようになるかを調査してまとめたい。

3年前は10人程度であった同級生が今は30人に増えている。町外には連絡のつく同級生が60人ほどいるので、「能登交流親善大使」と位置づけている。



商店街の歩道で雪像を作成



昔懐かしい駄菓子屋とファミコン